

高 祖 城

福岡県前原市大字高祖字城における埋蔵文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第 85 集

2003

前原市教育委員会

序

前原市は、古代より、北部九州における大陸文化の門戸として、わが国の歴史を学ぶ上で、数々の重要な足跡を残して栄えた地域であります。古くは江戸時代天明年間、青柳緋信の『柳園古器略考』によって紹介された三雲南小路遺跡・井原鐘講遺跡などの弥生時代の王墓をはじめとして、弥生時代の多数の木製品を出土し、当時の庶民の生活を浮き彫りにする上種子遺跡、日本最大の径を誇る内行花文鏡など約40面もの青銅鏡を出土した謎多き平原遺跡、北部九州の円墳のなかでも最大級の径を誇る釜塚古墳、7世紀代に築城された謎多き古代山城の雷山神籠石、古墳真備が最初に専当官となって天平勝宝8年(756)から神護景雲2年(768)まで約13年の歳月を要して築城された古代山城の怡土城など、周知の遺跡はいうまでもなく、現在でも市内には数多くの大切な文化財が眠っています。

本報告の高祖城は奈良時代の山城である怡土城の一部を再利用して築城された中世の山城です。高祖城が所在する高祖山は自然遊歩道が設置され、軽登山のメッカとして市民に親しまれています。その高祖山の頂上部を中心にして高祖城は郭群を形成しています。元々、高祖山の各郭では多数の瓦片が散乱し、石垣の一部も確認できるため、石垣と瓦を使用した建築物の所在を想定していましたが、今回の発掘調査によって約400年ぶりに高祖城の遺構の一部が姿を現し、瓦等の遺物も多量に出土しました。さらに、踏査の結果、高祖城に関連すると考えられる「里城」等の情報および資料の蓄積がなされたということで、非常に意義のある調査となったようです。本書が、今後の学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査を行うにあたりましては、各方面から御指導、御協力をたまりました。関係各位の御理解、御協力に厚くお礼申し上げます。今後とも、文化財保護活動に格別の御配慮、御協力をたまりますようお願いいたします。

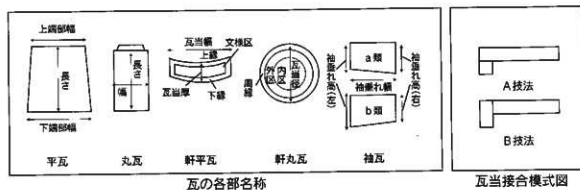
平成15年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊竹利剛

例言

1. 本書は高祖山の自然遊歩道改修に先立ち、前原市教育委員会が平成10年度に実施した高祖城の発掘調査報告書である。
2. 高祖城は福岡県前原市大字高祖字城1に所在する。
3. 発掘調査は瓜生秀文が担当した。
4. 本書の編集は瓜生・山口裕平(福岡大学大学院)で協議の上、瓜生が行った。
5. 本書に掲載した遺構・遺物実測図は瓜生が作成した。要図は瓜生・山口が画した。
6. 本書に使用した遺構・遺物写真は瓜生が撮影した。
7. 本書における遺物の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準上色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修)1995年版を使用した。

8. 本書で用いた方位は実測図・本文ともに磁北を用いている。
9. 本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅲ(2を除く)・Ⅳ(3を除く)・Ⅴを瓜生が、Ⅲ-(2)、Ⅳ-(3)を山口が行った。
10. 遺物の整理は瓜生と山口が行い、瓦の整理・分類にあたっては山崎龍雄氏(福岡市教育委員会)、後藤正則氏(後藤陶業館)、松尾茂雄氏の各氏からご教示を賜った。
11. 調査時点において、高祖山山頂の三角点(標高416m)が破壊されていたために標高が川せなかった。そのために上ノ城の上塁の最も高い箇所を基準高(標高0m)として測量を実施している。各遺構の標高については不明ではあるが、付図2に土塁の最も高い箇所に設置した基準高からの標高差を示している。
12. 図版1の高祖城想定図は小幡政義氏(北部九州中近世城郭研究会)の作品であり、中西義昌氏(大分県竹田市教育委員会)作成の縄張り図(付図1)を基に作図している。この想定図は小幡政義氏の御了解を得て転載させていただいた。また、付図1についても中西義昌氏の御了解を得て転載させていただいた。
13. 瓦の各部名称及び軒(袖)瓦の接合技法は下図に示すので参照していただきたい。



本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査報告	5
1. 高祖城概説	5
2. 調査の概要	6
3. 調査の記録	6
(1). 遺構	6
(A). 1調査区	6
(B). 2調査区	7
(C). 3調査区	7
(D). 4調査区	8

(E). 5調査区	8
(F). 6調査区	9
(G). 7調査区	9
(2). 遺物	10
(A). 土器・金属器	10
(B). 瓦	10
(C). 下ノ城採集遺物	19
IV. おわりに	23
1. 遺構について	23
2. 高祖城の破却について	23
3. 遺物について	25
4. 唐花菱の家紋瓦について	26
V. 「里城」想定地採集遺物	28
1. 発見の経過	28
2. 遺物概説	28

挿図目次

第1図. 高祖城の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)
第2図. 調査区位置図 (1/200)
第3図. 上ノ城1調査区遺構実測図 (1/60)
第4図. 上ノ城2調査区遺構実測図 (1/60)
第5図. 上ノ城4調査区遺構実測図 (1/60)
第6図. 上ノ城5調査区遺構実測図 (1/40)
第7図. 上ノ城出土土器・金属器実測図 (1/3, 1/1, 1/2)
第8図. 上ノ城出土平瓦実測図 (1/6)
第9図. 上ノ城出土軒平瓦実測図 (1/3)
第10図. 上ノ城出土丸瓦実測図 (1/6)
第11図. 上ノ城出土軒丸瓦実測図 (1/3)
第12図. 上ノ城出土筒瓦実測図 (1/3)
第13図. 上ノ城出土特殊瓦実測図 (1/3)
第14図. 下ノ城採集土器実測図 (1/3)
第15図. 下ノ城採集瓦実測図 (1/6)
第16図. 下ノ城採集瓦実測図 (1/3)
第17図. 上ノ城5調査区破却状況断面図 (1/20)
第18図. 高祖城出土瓦分類図 (1/5)
第19図. 「里城」想定地位置図 (1/5,000)
第20図. 「里城」想定地採集遺物実測図 (1/3, 1/6)

図版目次

- 図版1 高祖城想定図(小幡政義氏画)
図版2 a. 高祖城跡瓦
b. 高祖城出土瓦(一式)
図版3 上ノ城全景(北より)
図版4 a. 上ノ城1調査区(西より)
b. 上ノ城1調査区(南より)
図版5 a. 上ノ城2調査区(北より)
b. 上ノ城2調査区(北西より)
図版6 a. 上ノ城3調査区(北より)
b. 上ノ城4調査区(北西より)
図版7 a. 上ノ城5調査区(北西より)
b. 上ノ城5調査区(北より)
図版8 a. 上ノ城6調査区(西より)
b. 上ノ城7調査区(北より)
図版9 a. 上ノ城東谷部石壁(北より)
b. 上ノ城5調査区破却状況(東より)
図版10 a. 上ノ城出土土器・金属器
b. 上ノ城出土平瓦
図版11 a. 上ノ城出土軒平瓦
b. 上ノ城出土上丸瓦
c. 上ノ城出土軒丸瓦
図版12 a. 上ノ城出土袖瓦
b. 上ノ城出土特殊瓦
図版13 a. 下ノ城採集土器
b. 下ノ城採集瓦1
図版14 a. 下ノ城採集瓦2
b. 「里城」想定地採集遺物

付図目次

- 付図1 高祖城縄張り図(1/1,000)
付図2 高祖城(上ノ城)遺構図(1/250)

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成10年9月上旬、地元行政区より福岡県前原市大字高祖字城1(上ノ城)に所在する概設の自然遊歩道の一部が崩壊していると報告があり、登山者のために別の場所に階段を新設してくれないかと要望が上がった。

それを受けて、前原市教育委員会・教育部・文化課は約1週間を要して踏査を実施した。踏査の結果、概設の自然遊歩道はかつて虎口跡(城門跡)であった可能性が高く、そのために当該場所に概設の自然遊歩道が設置された可能性が高いことがわかった。さらに新設予定箇所にも石壁の一部が見え隠れしていた。当該地区は国指定史跡「怡土城」の郭内であり、工事を実施する以前に発掘調査を実施する必要性があったために、地権者である福岡営林署と発掘調査について協議した。協議の結果、発掘調査は平成10年9月16日より開始することになった。

発掘調査は予想以上に過酷を極めた。まず、調査地点(標高約416m)にたどり着くまで毎日が登山(上り約2時間、下り約1時間)であった。また、調査地点にたどり着いても高祖山山頂部の天気は変わりやすく調査時間の制約をかなり受けた。その過酷を極めた発掘調査もかなりの成果が上がり、最後に遺構を保全する埋戻しを行い平成11年2月16日に無事終了した。

なお、発掘調査終了後、調査結果をふまえて、自然遊歩道の新設について福岡県教育委員会、前原市教育委員会、地元行政区の3者で再協議した。その結果、概設の自然遊歩道を再利用することになり、高祖城の遺構は保全された。

2. 調査の組織

本調査(平成10年度)及び報告書作成(平成14年度)にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	坂本勝善(平成10年度)	菊竹利嗣(平成14年度)
	教育部長	有田稱之(平成10年度)	上田勇介(平成14年度)
	文化課長	吉村耕治(平成10年度)	小池史哲(平成14年度)
	文化課文化財係長	林 覚(平成10・14年度)	
庶務	同 文化振興係長	宮本洋子(平成10年度)	中村鉄弥(平成14年度)
調査	同 文化財係	瓜生秀文(平成10・14年度)	

発掘・整理作業 中原マチ子 市丸千賀子 小金丸利枝 岡田りつ子 柏田 睦子 和多 治子
久間美佐子 吉木 輝代 徳永美根子 牧井 定代 高橋マツ子 杉本美賀子
柴田由美子 楢崎 尚了 末益真奈美

II. 位置と環境

高祖城は、前原市と福岡市とが境を接する高祖山山頂部に位置する。高祖山は標高416mを測り、山頂部は糸島半島を一望できる景勝の地となっている。この高祖山には天平勝宝8（756）年から神皇景雲2（768）年までの約13年間をかけて吉備真備によって築城された怡土城が所在し、その怡土城の一部を再利用して高祖城は築城されている。高祖城の築城時期については不明ではあるものの、大正14年（1925）の豊田秀吉の九州制覇の際に築城したと考えられている。

高祖城から二丈町方面に視野を置くと、町名の由来になった二丈岳が望める。この頂上部には高祖城の支城である二丈岳城が所在する。二丈岳城にも石塁が構築され、互等の遺物が出土することから当時としては珍しい瓦葺の建物が構築されていたと想定されている。その麓には里城も想定されており、遺構の所在地の確認が急がれる。

高祖城から背振山系に沿って雷山に視野を移すと、7世紀代に築城されたとされる雷山神籠石が視界に入る。雷山中腹の谷部を塞ぎ止めるように谷の尾根線にそって南北側にそれぞれV字形に列石が設置され、谷部には水門が設置されている。しかし、城内部等その子細について不明な点が多く、本格的な発掘調査が待たれる。なお、雷山神籠石の周辺部に箭城、旗振嶺城という高祖城と二丈岳城とを結ぶ中継拠点（烽火）的な砦があったことが想定されており、その所在地の確認も急がれる。

高祖城から前原市と二丈町との市境一帯を望むと、城山が視界に入る。この城山の頂上部に加布里城が所在する。遺構は比較的良く残存しており、現在でも郭、堀跡等を確認できる。この城は高祖城の支城の一つで、原田氏の家臣岩隈河内守が城代として在城していたと伝えられている。

高祖城の北西部には、怡土平野が広がる。怡土平野において小島状に浮かんでいるように見えるのが柴山である。その頂上部には舞岳城が所在する。高祖山と柑子岳を一望でき、怡土平野も全体的に見出すことができることから怡土平野部における高祖城の重要な支城の一つであった。永禄年間、波多江鎮種が住み、その後、原田氏の家老笠次郎繁種が入城する。笠氏は後に備前に入り、今の築山法林寺を開いたといわれる。なお、舞岳城は後世の造成を受け、頂上部の郭のみ残存している状況である。現在は笹山公園として市民の憩いの場になっている。

舞岳城の東部にはかつて泊城があったとされる。泊城は大友氏に属した泊氏の居城であった。遺構は残存しておらず、「城崎」・「堀廻り」等の地名のみ残る。

怡土平野の東端部一帯には波多江遺跡群が広がる。波多江遺跡群のなかでも、波多江丹波守屋敷（波多江城）は遺構の残存状態が良く、周囲を取り囲む高さ約3mの土塁、幅約6mを測る堀跡などを確認できる。波多江丹波守屋敷の居城と伝えられている。なお、その南側には波多江遺跡があり、ここから高祖城とはほぼ同時期（戦国時代）の館跡を検出している。

最後に、高祖城から北部を望むと、柑子岳（福岡市西区今津）が視界に入る。その頂上部には柑子岳城が所在する。柑子岳城は大内氏と大友氏とが糸島地方の覇権を争っている際の大友氏側の拠城であり、城代として豊後より臼杵氏が派遣されていた。大友氏は柑子岳城の西城として、水崎山城（福岡市西区）、馬場城（志摩町）、泊城（前原市泊）等の支城を次々に築城し、挿るぎない地盤を固めていった。臼杵氏と高祖城主原田氏は糸島地方の覇権をめぐる再三合戦を行っている。



第1図 高祖城の位置と周辺の遺跡 (1/50,000) (本邦の国名は主要遺跡群、もしくは遺跡、■は方形の遺跡を示す)

III. 調査報告

1. 高祖城概説

高祖城は前原市と福岡市と境を接する高祖山（標高416m）の頂上部に所在する。城の縄張りとしては「上ノ城」・「下ノ城」を中心に郭群を形成している。

上ノ城は高祖城の最終段階における中心の郭である。上ノ城は三段の郭からなり、東西方向に約25m、南北方向に約85mを測る。各段の郭の北端部には垂直に積まれた石塁が巡り、虎口（城門）が設置されている。最も高い段の郭の東西部には高さ約1m程の土塁が残存しており、ほぼ中央部には輪台と考えられる基壇を伴った方形の高まりを確認できる。現在、郭の北端部に自然遊歩道が設置されており、上ノ城と下ノ城は自然遊歩道で直接つながっているが、周辺の遺構の分布状況を考慮に入れると、上ノ城は本来独立した郭であったと考えられる。

下ノ城は築城当時における中心の郭であったと考えられる。下ノ城と上ノ城との間には大規模な空堀がある。現在、その空堀は下ノ城と上ノ城の間をつなぐ郭の一部となっているが、その空堀はかつて築城当時における南限を示し、上ノ城に城域を拡張する際に郭の一部として造成されたと考えられる。下ノ城は二段の郭からなり、東西方向に約45m、南北方向に約65mを測る。各段の郭の端部には垂直に積まれた石塁が巡り、虎口（城門）が設置されている。

高祖城の築城時期については、建長元年（1249）、原田種次が廃城となった怡土城の一部を利用して高祖城を築いたと伝えられている。しかし、そのことを裏付ける文献史料等が築城時期については不明な点が多い。

大内氏と大友氏が糸島地方の覇権を争っている際、原田氏は大内氏の傘下に入る。怡土郡代として島田氏が周防より派遣され、高祖城は大内氏の拠点となった。対する大友氏は豊後より臼杵氏を派遣し、柑子岳城を拠点とした。原田氏と臼杵氏は糸島地方の覇権をめくり再三戦を繰り返した。

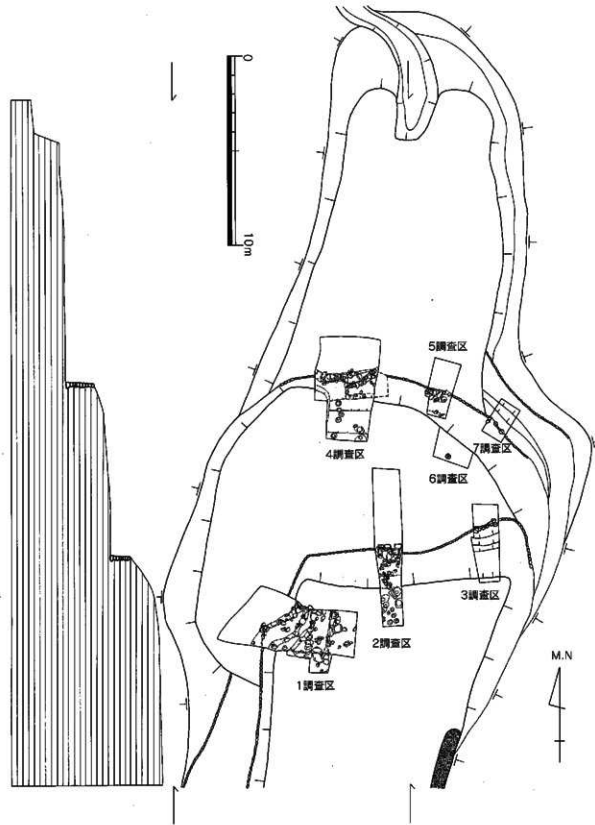
大内氏の滅亡後、原田氏は一時大友氏の傘下に入る。ところが、その頼りとしていた大友氏は天正6年（1578）の耳川の合戦で島津氏に敗北。大友氏の糸島地方における影響力の低下とともに原田氏は国人として地位を確立する。

天正14年（1586）、豊臣秀吉が九州平定の軍を起すこと、原田氏の一族のほとんどが秀吉への降伏を遂げた。しかし、島津氏に属していた原田信種は抗戦を決意する。原田氏は長垂山に500人、油坂に500人、日向嶺に800余人の兵を派遣し、さらに2000余人で高祖城に籠もり秀吉の軍と対決しようとした。しかし、小早川隆景が来攻し、長垂山、油坂の陣が破られる。高祖城に籠もる原田信種は日向嶺方面に秀吉軍の移し旗指物・馬具がきらめくのをみて肝をつぶし、頼みの島津氏・秋月氏の援軍も来ないのがわかると諦めて交戦しないで降伏した。高祖城はその後すぐ破城された。

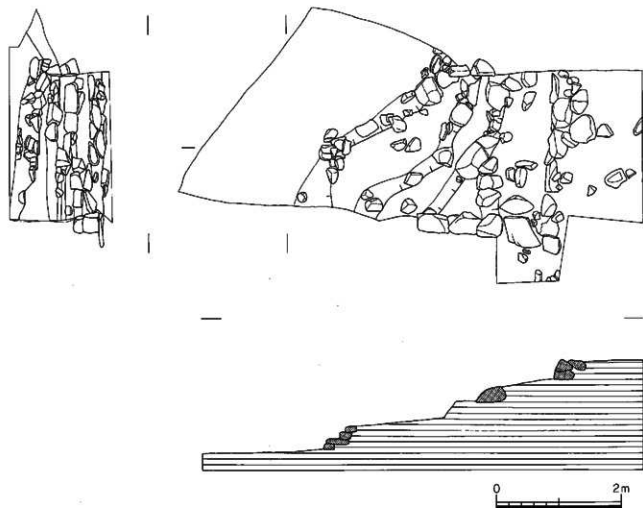
なお、高祖下城後、原田信種は小早川隆景の傘下に入り、その後加藤清正の与力となる。天正20年（文禄元）正月より本格化した豊臣秀吉の朝鮮侵略において原田信種は加藤清正の武将として出兵する。そして慶長3年9月24日に朝鮮半島で戦死したとされるがその真偽については不明である。

参考文献 『福岡県の城』（廣嶋篤夫・海鳥社・1995年）

『大藏姓原田氏編年史料』（廣瀬正利・文献出版・2000年）



第2図 調査区位置図 (1/200)



第3図 上ノ城1調査区遺構実測図 (1/60)

2. 調査の概要

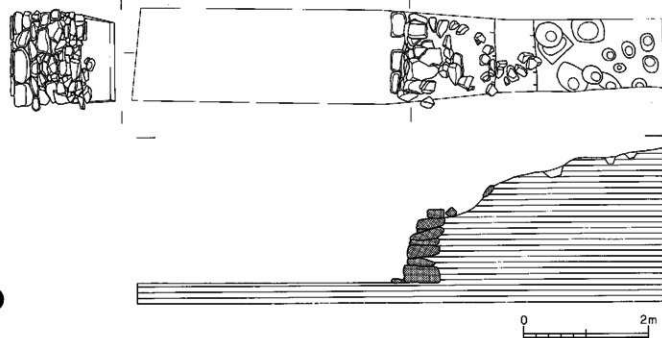
調査地点は高柱山頂上部(標高416m)に広がった「上ノ城」と称される郭に位置する。自然遊歩道新設予定地を考慮して1から7区の調査区に分けて調査を実施した。1区の調査面積は17㎡、2区は16㎡、3区は6㎡、4区は17㎡、5区は4.2㎡、6区は3㎡、7区は2.4㎡を測り、総調査面積は約66㎡を測る。調査によって検出された遺構は、1・4区においては虎口(城門)、2・3・4・5・7区は石塁、6区は柱穴であった。遺物としては土師皿、陶磁器、瓦等が出土している。

3. 調査の記録

(1). 遺構

(A). 1区(第3図、図版4-a、b)

1区は上ノ城の最も高い郭の北西隅部に設定した。調査以前より、当該区間のみ石塁線が切れ、一部に階段のステップ状に石材が平行に並んでいるのを確認できたため当該地に虎口(城門)の所在を想定できた。表土(腐葉土)を除去すると、人頭大の石材がびっしりと埋め込まれた層を検出し、その下層から5段からなる虎口がその姿を現した。虎口の幅は2.1m(約7尺)を測る。踏石



第4図 上ノ城2調査区遺構実測図 (1/60)

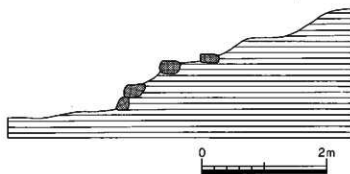
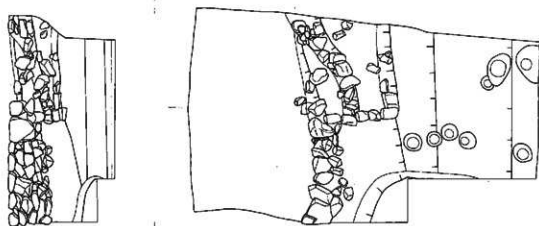
部には上面を整形した石材が使用されているが、一部抜き取られている。また、各踏石部の石材は崩落防止のため小石で補強されている。なお、虎口の最上部には建物礎石の一部を確認できることから、この虎口は櫓門であった可能性が高いと考えられる。さらに瓦等も出土することからその櫓は瓦葺であったことも想定される。

(B). 2区(第4図、図版5-a、b)

2区は上ノ城の最も高い郭の北端中央部に設定した。調査以前より、石塁線の一部が見えていたために当該地に石塁の所在を想定できた。調査当初、表土を除去するとスロープ状に組まれた粗雑な石塁を検出した。石塁にしては登りやすかったために不思議に思い、ボーリング棒で確認したところ、その粗雑な石塁の下にも石塁があることが判明した。そこで粗雑な石塁を取り除くと人頭大の石材を整然と垂直に組んだ石塁がその姿を現した。現存高約1.5mを測り、復元高は約2mと推測される。テラス側には柱穴群が検出され、この柱穴群は防御のための杭列跡の一部と想定できる。また、石塁の基底部前面には方形の石材が置かれている。この石材は石塁崩落防止のために設置されたと考えられる。なお、当該調査区からは瓦等多量の遺物が出土しているが、スロープ状に組まれた粗雑な石塁の上部からのみ出土している。

(C). 3区(図版6-a)

3区は上ノ城の最も高い郭の北東隅部に設定した。調査以前より、石塁線の一部が見えていたために当該地に石塁の所在を想定していたが、表土(腐葉土)を除去すると予想以上に遺構は破壊を受けていた。石塁の基礎部分のみ残存していた。当該調査区からは瓦等の遺物が多量に出土している。



第5図 上ノ城4調査区遺構実測図 (1/60)

(D). 4区 (第5図、図版6-b)

4区は上ノ城の二段目の郭の北西部に設定した。調査以前より、当該区画のみ石塁線が切れていたのでために当該地に虎口(城門)の所在を想定できた。表土を除去すると、石材がびっしりと埋め込まれた層を検出し、その下層から3段からなる虎口の一部分が姿を現した。石塁線の切れる部分の幅が約2.1mを測ることから、虎口の幅は2.1m(約7尺)と推測する。ただし、後世の破壊をかなり受けているため遺構の残存状況は悪かった。各階石部には上面を整形した石材が使用されているが、大部分の石材が抜き取られている。当調査区から瓦等の遺物が多量に出土している。

(E). 5区 (第6・17図、図版7-a、b)

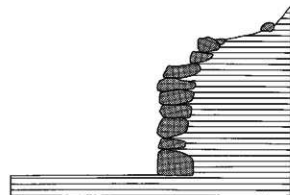
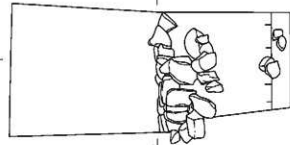
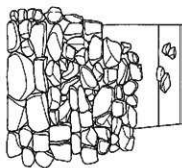
5区は上ノ城の二段目の郭の北端中央部に設定した。調査以前より、石塁線の一部が見えていたために当該地に石塁の所在を想定できた。表土を除去すると、当調査区からもスロープ状に組まれた粗雑な石塁を検出し、その下から人頭大の石材を意然と垂直に組んだ石塁が姿を現した。現存高約1.7mを測り、復元高は約2mと推定される。なお、当調査区からは瓦等多量の遺物が粗雑な石塁の上部から大部分出土しているが、例外的に青磁碗1点のみ粗雑な石塁の真下から伏せた状態で出土している。

(F). 6区 (図版8-a)

6区は上ノ城の二段目の郭の北東部に設定した。柱穴を検出したが、防衛のための柵列跡の一部と考えられる。

(G). 7区 (図版8-b)

7区は上ノ城の二段目の郭の北西隅部に設定した。調査以前より石塁線が切れていたため、当調査区はかなり遺構が破壊を受けていることが想定された。表土を除去すると石塁の大部分の石材は抜き取られており、基礎部分のみ検出した。本来、上ノ城は独立した郭であったと考えられ、西側の郭群からのルートが当調査区一帯につながっていたと想定される。当調査区からは瓦等多量の遺物が出土している。なかでも四つ剛菱文の袖瓦の出土は注目する。



第6図 上ノ城5調査区遺構実測図 (1/40)

(2) 遺物

上ノ城の調査では表採品も含めてパンケース約30箱分の遺物が出土しており、なかでも平瓦、丸瓦の小片を中心とした瓦類が大半を占める。紙数の制約上すべてを図示することはできないので、ここでは完形品により近く、復元可能なものを中心に報告する。なお現在までに下ノ城において表採された遺物も併せて報告する。

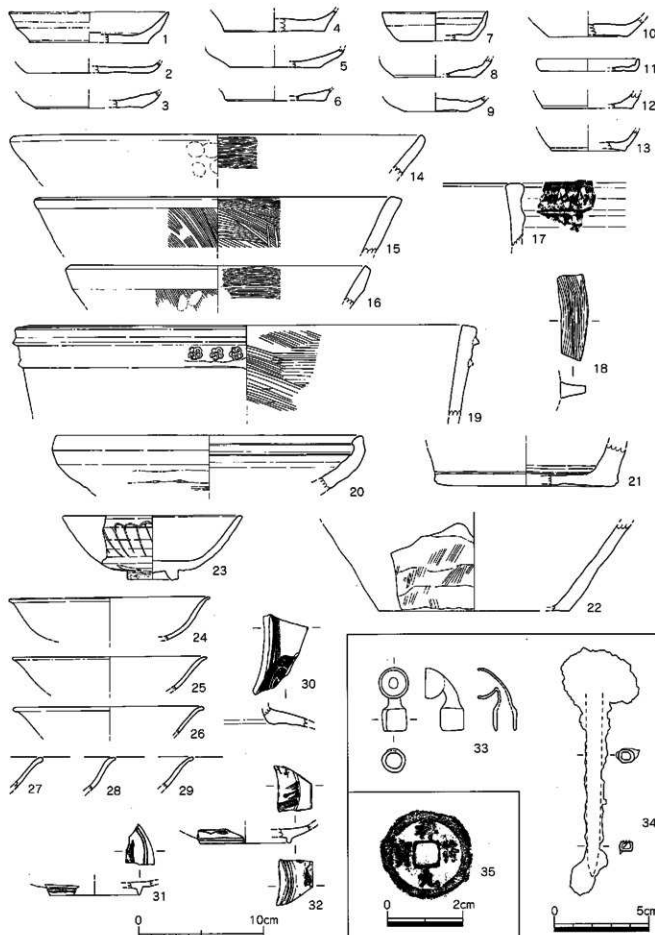
(A) 土器・金属器 (第7図、表1、図版10-a)

1~13は土師陶皿。いずれも破片だが復元可能な1は口径12.7cm、器高2.45cm、7は口径8.4cm、器高2.35cm、11は口径8.0cm、器高1.0cmをそれぞれ測る。いずれもロクロナデ成形で底部は糸切り(回転>静止)による。14~16は土師質土器。14・16は銅か。いずれも破片であるが14は口径32.4cm、16は口径23.6cmに復元できる。内面はハケ、外面はナデ調整。外面には煤が厚く付着。17は火舎片。内外面ともにナデ調整で口縁外面直下には花のスタンプ文が施文される。18は蓋の羽か。接合面で測れる。15・22は瓦質土器摺鉢。15は内外面にハケメ調整後、内面には柳歯を施す。22には内面に9条の柳歯がみられる。19~21は陶器。いずれも無釉である。19は甕で口縁外面直下には2条の突帯がめぐりその間に梅のスタンプ文が配される。20は鉢。復元口径24.4cm。21は壺の底部か。復元底径14.2cm。23は青磁碗。復元口径14.3cm。器高5.2cm。細葉弁碗で15世紀の所産か。24~29は白磁皿で16世紀の所産。いずれも破片だが24は15.9cm、25は15.4cm、26は14.8cmにそれぞれ口径を復元できる。24はやや焼成不良。30は磁州窯鉄絵壺の肩部片。白化粧土をかけた鉄絵で花のモチーフを描いた上に透明釉を施す。細かい買入がみられる。31・32は染付皿か。いずれも景徳鎮窯で16世紀の所産。31は見込に梅のモチーフを下絵付けする。32は見込や外面にも下絵付けを行うがそのモチーフは判断がつかない。高台には砂目が付着する。33は煙管の雁首。材質は青銅で長さ3.3cm、高さ2.05cm。34は鉄釘。長さは15.1cmだが弱ぶくれのため原形を留めていない。断面は中空で多角形を呈す。35は表採品で祥符元宝。径2.5cm。上から時計回りに祥・符・元・宝の4字を配すが裏は無文である。大中祥符元年(1008)初铸。

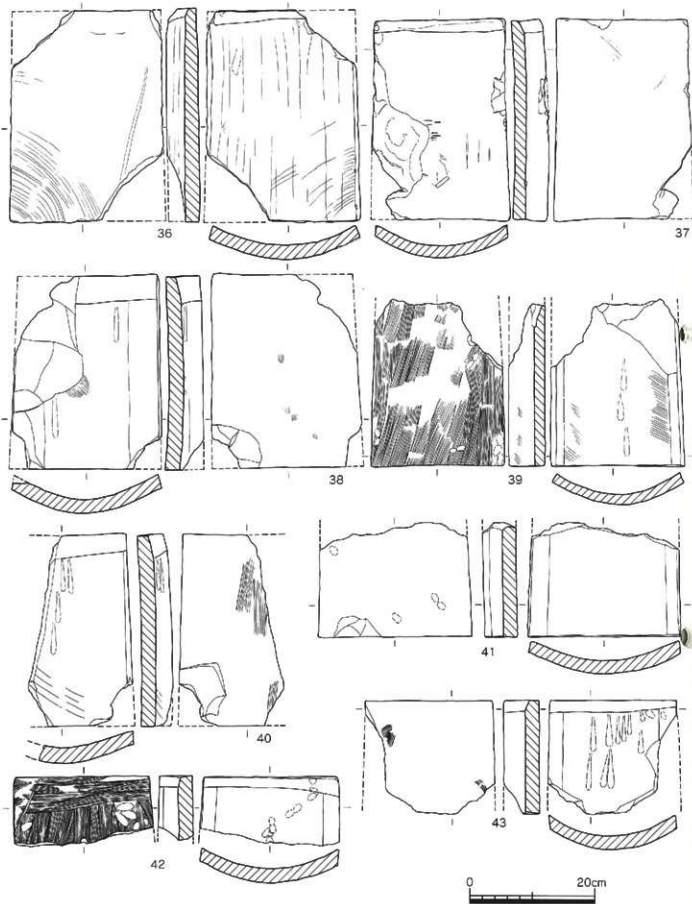
(B) 瓦

a. 平瓦 (第8図、表2、図版10-b)

36は上下端部を一部欠損するが長さ30.0cm、幅は復元で上端部23.5cm、下端部25.1cmを測る。凹面は成形後板状工具でナデしており、またハケを連弧状に施す。凸面には離れ砂が付着しており、凹面同様のナデやハケの痕跡が残る。やや軟質。37は下端部を一部欠損し凹面が剥離するが、長さ32.5cm、上端部幅20.9cm、下端部幅22.3cm(復元)を測る。凹面、凸面ともに成形後ナデ仕上げ。38も上下端部を一部欠損し凹面が大きく剥離するものの長さ31.2cm、幅は復元で上端部22.2cm、下端部24.1cmを測る。凹面、凸面ともに成形後丁寧なナデ仕上げ。39は上端部を欠損し残存長は26.5cm、幅は下端部で21.4cmを測る。凸面は離れ砂が付着しており、成形後タテハケを施し、一部ナデ消す。凹面にはコビキAの切り離し痕が残り、成形後丁寧なナデ仕上げ。40は左半部を欠損するが、長さ30.9cmを測る。凹面にはコビキAの切り離し痕、凸面にはハケ跡の痕跡が一部に残るが丁寧にナデ消す。41は下半部の破片で残存長18.5cm、下端部幅24.3cmを測る。凹



第7図 上ノ城出土土器・金属器実測図 (1/3、1/1、1/2)



第8図 上ノ城土平瓦実測図(1/6)

面、凸面ともに成形後丁寧なナデ仕上げ。42は上半部の破片で残存長11.2cm、上端幅21.3cm。凹面は成形の際の離れ砂がみられ、丁寧なナデ仕上げ。凸面は上端部ヨコハケ、それより下部はタテハケの調整。凹面から釘孔を穿孔。43は上半部の破片で、残存長18.3cm、上端幅20.2cm。凹面は成形の際の離れ砂が付着しており、丁寧なナデ仕上げで、凸面はハケメ調整後ナデ仕上げ。

b. 軒平瓦 (第9図、表3、図版11-a)

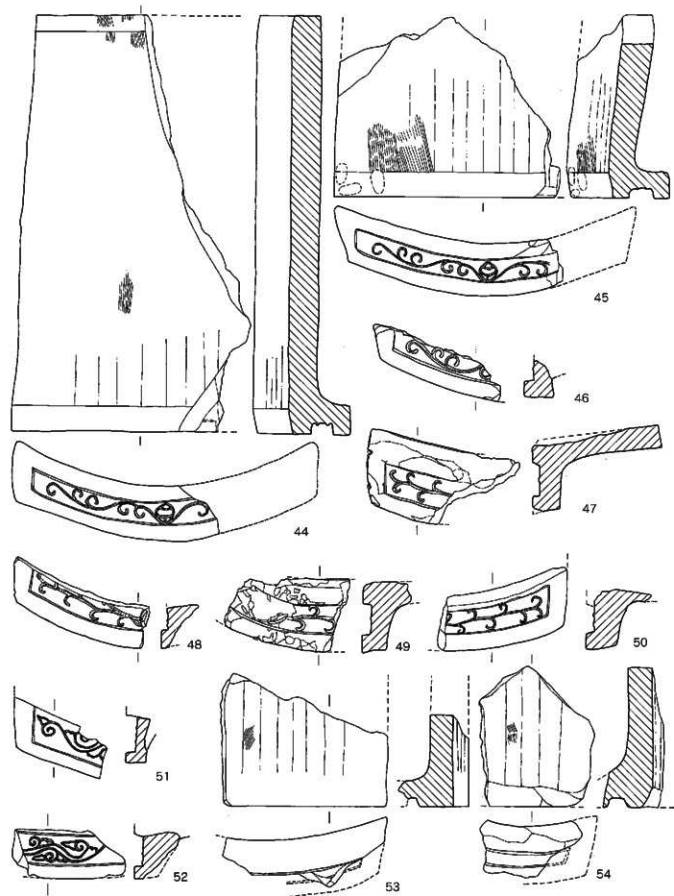
44は宝珠文を中心飾とした均整唐草文軒平瓦で、瓦当右半部を欠くものの幅24.2cmに復元できる。唐草文は宝珠文から派生する1本の蔓より下・下・上・上・下に5幅展開する。瓦当は平瓦(長さ33.5cm・右半部欠損)にA技法(凡例参照、以下同じ)によって接合。45・46も44と同様の文様構成ではあるが文様の太さなど細部で異なる。つまり同型式だが同范品ではない。45は瓦当右半部を欠損する。A技法によって接合か。46は瓦当上縁を欠くが平瓦との接合部で剥離した結果(A技法)である。47~50も瓦当文様は唐草文を基調とする。47・48は瓦当左半部、49・50は瓦当右半部の破片だが左右対称の均整唐草文にはならない。つまり左半部は中心飾より蔓が派生し下・上・下・上・下・上・下の順に唐草文が8幅展開するが、右半部は展開の仕方が上下逆になる。中心飾は48より宝珠文か。いずれもA技法によって接合され48・50は接合面で剥離する。51も同様に唐草文を基調とする。瓦当左半部の破片のため全体の文様構成はわからないが、中心飾から派生する平行した2本の蔓から上下に唐草が展開するようである。52は51と同型式の破片で右半部のもの。いずれもA技法によって接合され、接合面で剥離する。53は瓦当文様が無文となる。内区幅は1.2cmと狭い。上縁は約2.8cmと分厚く下縁は欠損する。B技法により接合か。54も53と同様に瓦当文様が無文となるが内区幅が1.5cmとやや広い。B技法によって接合。

c. 丸瓦 (第10図、表4、図版11-b)

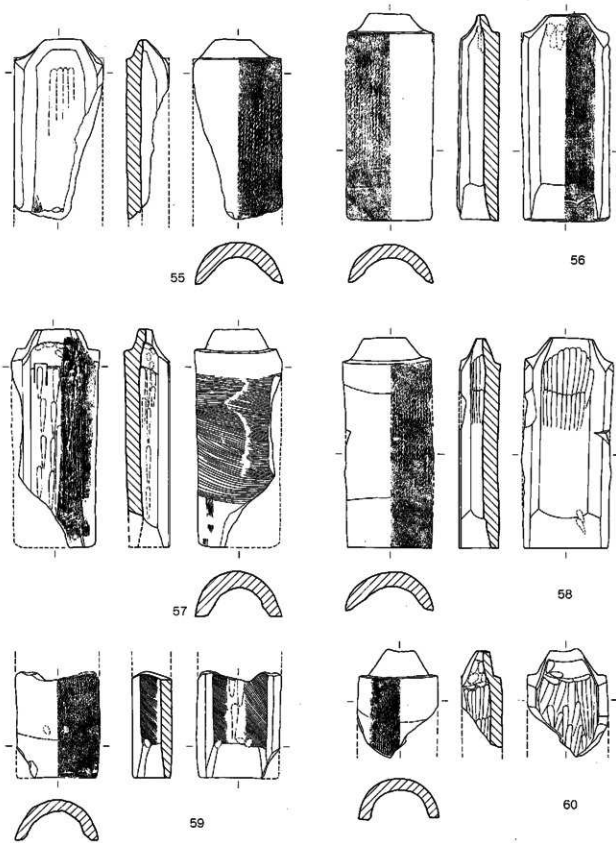
55は下端部を欠くが残存長28.9cm、幅14.1cmを測る。凸面は縄目叩き後、上端をナデ消す。凹面はわずかにコビキAの切り離れ痕が残るが、布目はきれいにナデ消されている。56は完形で長さ33.2cm、幅14.1cmを測る。凸面は縄目叩き後、上端はナデ、下端は横方向のハケで消している。凹面にはコビキAの切り離れ痕、細かい布目痕が残る。また玉縁部にはナデの痕跡が残る。57は一部欠けているが長さ35.0cm、幅13.9cmを測る。凸面は凹凸のある工具で横になでており、上端と下端はナデ消す。一部縦方向のハケを施す。凹面はコビキAの切り離れ痕、細かい布目が残る。また玉縁部を中心に指頭痕、ナデの痕跡が残る。58は一部欠損するもののほとんど完形で長さ33.7cm、幅14.0cmを測る。凸面は56と同様、縄目叩き後、上端はナデ、下端は横方向のハケで消す。凹面はわずかに布目が残るが大半はナデ消されている。59は下半部の破片で残存長17.0cm、幅13.3cmを測る。凸面は縄目叩き後ナデ消す。凹面はコビキAの切り離れ痕、布目痕をナデ消している。60は玉縁部の破片で残存長17.4cm、幅12.9cmを測る。凸面は縄目叩き後ナデ消す。凹面は布目痕をヘラ状工具でナデ消している。

d. 軒丸瓦 (第11図、表5、図版11-c)

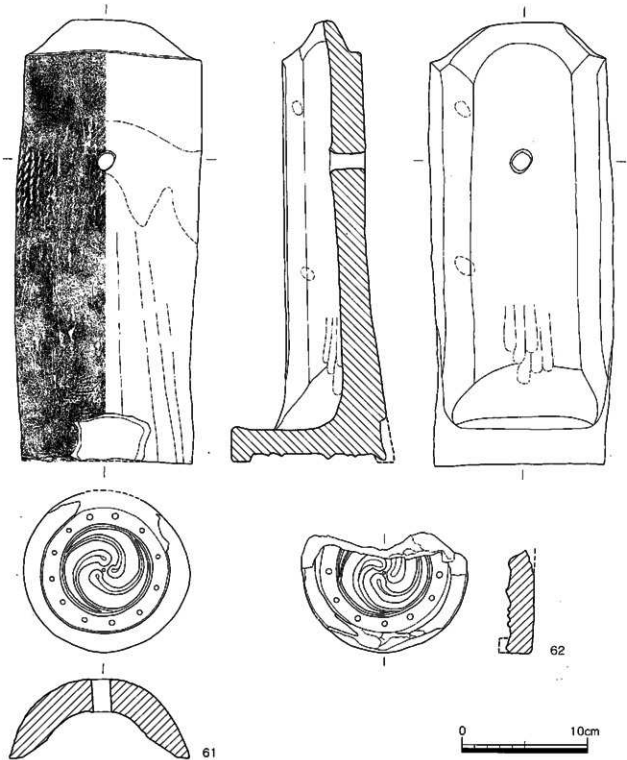
61は瓦当上端部を欠くもののほぼ完形で長さ30.0cm、幅14.0cm、瓦当は径13.0cm。瓦当内区は文様は三巴文で、径1ミリの珠文を中心に巴が左に巻き、尾が互いに接し圏線をなす。外区には



第9图 上/城出土平瓦实测图 (1/3)

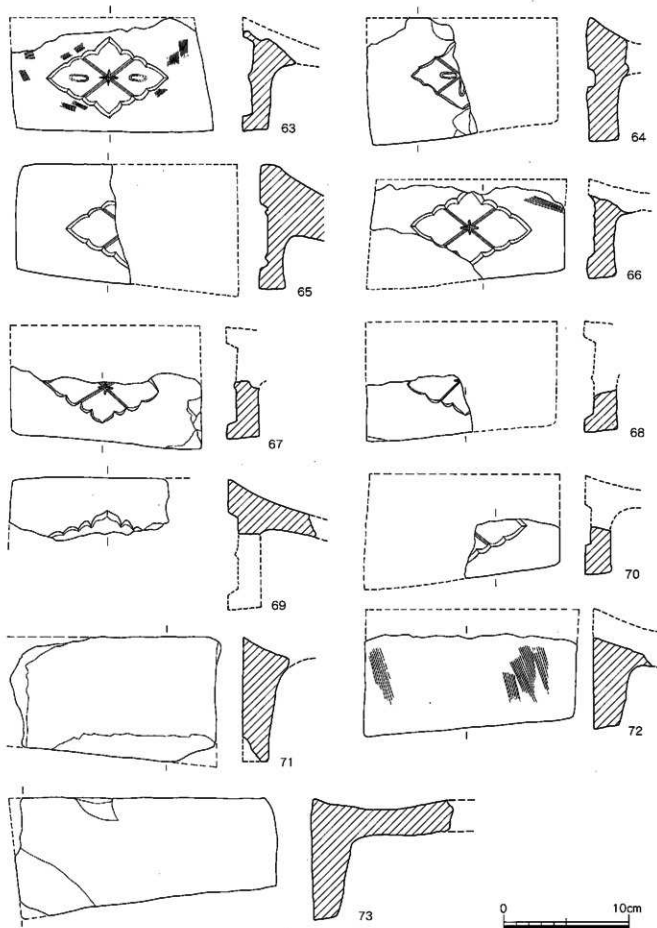


第10图 上/城出土瓦实测图 (1/6)

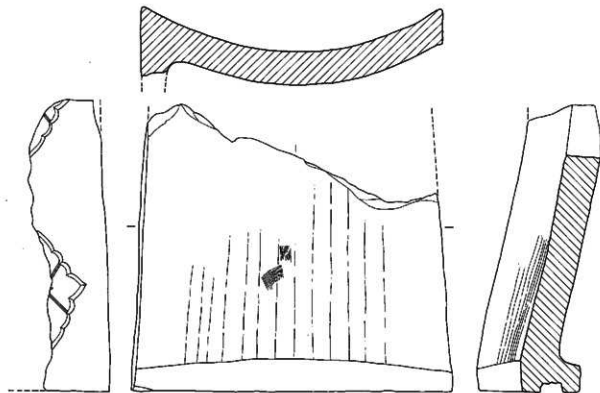


第11図 上ノ城出土軒丸瓦実測図 (1/3)

12個の珠文がめぐる。周縁は平縁である。丸瓦は玉縁式で凸面は綱目タタキ後ナデ調整、凹面はナデ調整。径1.5cmの釘孔が凸面から穿たれている。62は三巴文軒丸瓦の瓦当である。上半部を欠損するが径13.0cmを測る。61と同型式。焼成はやや不良でやや赤みを帯びている。



第12図 上ノ城出土柁瓦実測図 (1/3)



第13図 上ノ城出土特殊瓦実測図 (1/3)

e. 袖瓦 (第12図、表6、図版12-a)

袖瓦は切妻屋根の隅部に使用される瓦で、屋根の形状に沿うように袖垂れの下縁が右下がりものと左下がりものが認められる。ここでは便宜的に右下がりものをa類、左下がりものをb類として報告する。

63は唐花菱文袖瓦a類。完形で幅15.9cm、高さは左6.0cm、右7.8cm。袖垂れの唐花菱文は×字の簡線によって4つに区画され、いわゆる四つ割菱文となり、中心には十字の飾がある。中心飾の左右の菱文の中央には、あまり明瞭ではないが横長楕円の文様がみられその縁が突起する。袖垂れの接合はA技法。64は唐花菱文袖瓦b類。右半部を欠損する。袖垂れの文様は63と同様の唐花菱文だが、中心飾から一文字のスタンプ文が十字に配される。中心飾左右の文様はみられない。A技法により接合。65~70も唐花菱文袖瓦だが、63や64にみられるような横長楕円や一文字の文様はみられず簡略化した型式である。65・67はa類、66・68・70はb類、69は上半部の破片のため判断がつかない。いずれもA技法により接合。71は無文袖瓦a類。左端部を欠損する。A技法により接合。72は無文袖瓦b類。完形で幅16.5cm、高さは左7.5cm、右6.0cm。袖垂れは無文だがタテハケをきれいにナデ消している。A技法により接合。73は無文袖瓦b類。左端部をわずかに欠損する。A技法により接合。

f. 特殊瓦 (第13図、表7、図版12-b)

74は向瓦。袖垂れが瓦当の左側に接することから屋根の左角に使用される。瓦当は宝珠文を中心飾とした均整唐草文で幅24.3cm、厚さ4.3cmの完形。44~46と同型式。袖垂れは大きく欠損するが唐花菱文が2個配される。残存幅23.1cm、右残存高5.7cm。瓦当、袖垂れともにA技法により平瓦に接合する。平瓦は上半部を欠損し、残存長22.6cm、幅は下端部で25.2cmを測る。凹面は成形後丁寧なナデ仕上げ。凸面は成形後タテハケを施し、丁寧なナデ仕上げ。75は鬼瓦か。上半部は欠損するが下半部には軒丸瓦あるいは丸瓦が接するような半円形の削り込みがみられる。裝飾についてはその接合面で剥離しているため詳細は窺えない。残存長は11.0cm、幅は復元で12.6cm。胎土は粗く、白色砂粒が多く混ざる。76は平瓦を大きく削げたような形状をしており椽瓦片の可能性が指摘できる。残存長15.4cm、残存幅13.1cm。凹面は成形後ナメハケを施し一部ナデ消す。外面は成形後ヨコハケを施し丁寧なナデ仕上げ。

(C) 下ノ城採集遺物

a. 土器 (第14図、表8、図版13-a)

77は須恵器環身片。復元口径10.8cm。内外面ともに回転ナデ調整。色調は灰色を呈す。6世紀末の所産。78~93は土師器皿。いずれも破片だが復元可能な78は口径12.8cm、器高2.15cm、82は口径9.4cm、器高1.8cm、92は口径6.5cm、器高1.5cmをそれぞれ測る。いずれもロクロ成形で底部は摩滅により不明瞭なものもあるが大半は糸切り(回転>静止)による。94は土師質土器鉢か。口縁部は端部を内に折り込む。その外面直下には四つ割菱のスタンプ文を縦に配し、下部に2条の突帯をめぐらす。内面は粗いヨコハケ調整。95は施釉陶器。壺の口縁部で復元口径14.8cm。口縁端部は玉縁状となり、全面に暗褐色釉を薄く施軸する。胎土は粗く白色砂粒を多く含む。96は備前焼か。甕の肩部と考えられる。無釉で赤褐色を呈し、焼成は良好。97は施釉陶器。甕もしくは壺

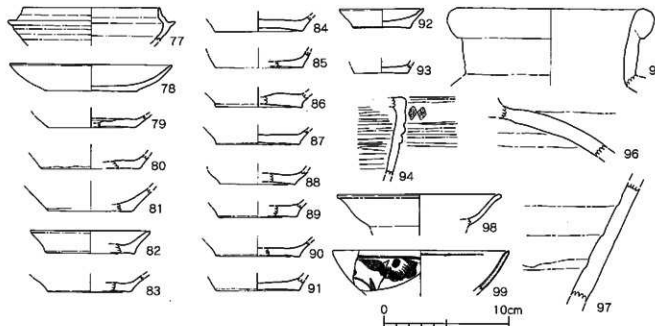
の胴部下半か。外面には黄褐色釉を薄く施す。粘土帯を積み上げて成形しており内面には線目が明瞭に残る。98は白磁皿で16世紀の所産。復元口径12.7cm。灰白色の釉を薄く施す。99は景徳鎮窯附碗で16世紀の所産。復元口径14.0cm。コバルトで花のモチーフをド絵付けし、灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗い。

b. 平瓦・丸瓦 (第15図、表9、図版13-b)

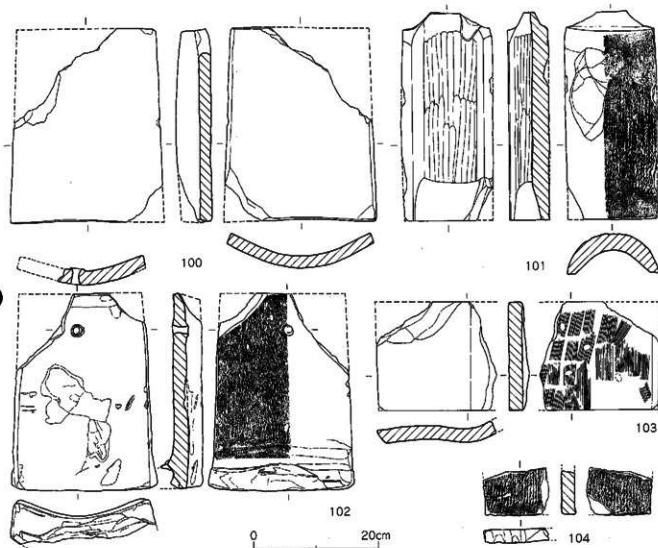
100は平瓦。上下端部を一部欠損するが、長さ30.0cm、幅は復元で上端部21.9cm・下端部24.6cmを測る。凹面、凸面ともに成形後丁寧なナデ仕上げ。焼成は良好で胎土には白色砂粒が多く混ざる。101は丸瓦。玉縁部と下端部を欠き、凸面が大きく剥離するがほぼ完形で長さ33.4cm、幅14.8cmを測る。凸面は縄目叩き後、上下端部を丁寧にナデ消す。凹面は丁寧なナデ仕上げのためコビキ痕や布目痕はみられない。焼成はやや不良。102は軒平瓦だがレイアウトの都合上ここで報告する。瓦当を大きく欠損するが、平瓦は上半部をわずかに欠損するのみで、長さ31.5cm、幅は上端部20cm(復元)、下端部22.1cmを測る。凹面は成形後、縄目叩きを施し丁寧にナデ仕上げ。凸面も同様に縄目叩きを施し、粗くナデ仕上げる。上半部中央には凸面から釘穴を穿孔する。瓦当は大きく欠けてはいるが、わずかに残る左半部から文様は無文とわかる。内区の幅は1.5cm。上縁は厚く4.0cmを測るが、下縁は欠損する。A技法により接合。焼成はやや不良で赤みを帯びている。103は断面形が波打ち、近世以降にみられる棧瓦の一種か。欠損するもの長さは17.4cm、幅は19.0cm以上。左側に図示した面は成形後丁寧にナデ仕上げ。右側の面は成形後、縦方向のハケメを施し一部ナデ消す。焼成はやや不良。胎土には白色砂粒を多く含む。104は平瓦の一種と考えられる破片で長さ7.6cm、幅10.6cmを測る。縄目叩きが施され、側面にはオサエによる指頭痕が残る。焼成は良好。

c. 軒瓦・袖瓦 (第16図、表10、図版14-a)

105は三巴文軒丸瓦の瓦当。上端部をわずかに欠損するが径13.0cmを測る。瓦当内区は三巴文

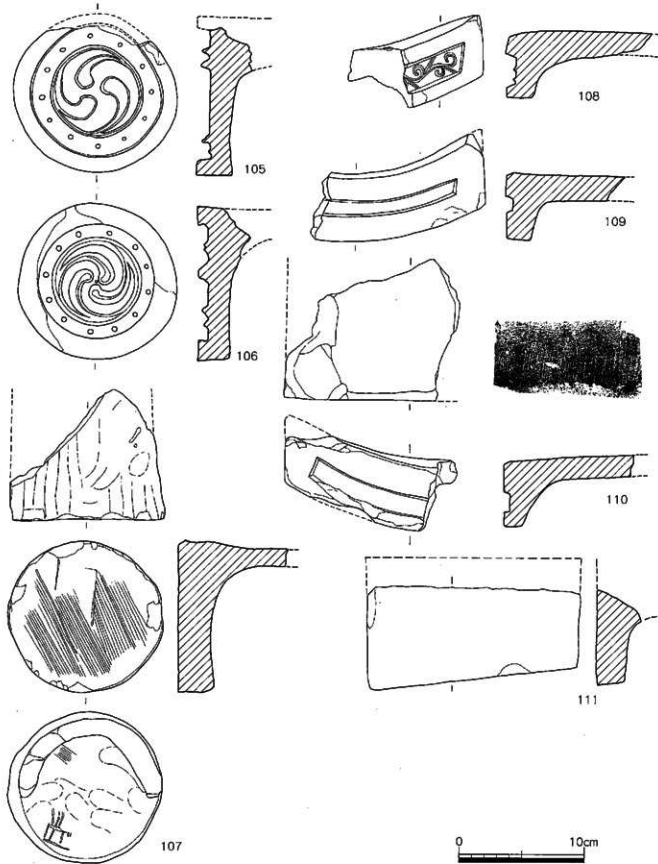


第14図 下ノ城採集土器実測図 (1/3)



第15図 下ノ城採集瓦実測図1 (1/6)

は右巻きで巴が太い。巴の尾が互いに接し圓線をなし、内区と外区を画す。外区には珠文が12個めぐる。周縁は平縁。丸瓦にはB技法により接合。106も105と同様に三巴文軒丸瓦の瓦当だが、内区の珠文の有無、巴の太さ、巻き方が異なる。周縁をわずかに欠損するが径12.5cmを測る。B技法により接合。61・62と同型式。107は無文軒丸瓦。瓦当は完形で径12.0cm。瓦当文様は無文だが、ナメハケが施される。内面にはへら記号がみられる。丸瓦にはB技法によって接合され、縦方向にナデ付ける。108は唐草文軒平瓦。右半部の破片のため全体の文様構成は分からないが、中心部から派生する蔓から唐草と新しい蔓がセットで上下に展開するように窺える。A技法によって平瓦に接合される。109は無文軒平瓦。瓦当左半部を欠損しているが幅21.6cmに復元できる。瓦当厚5.4cmで内区幅1.2cm、上縁幅2.2cm、下縁幅2.0cmをそれぞれ測る。平瓦にはA技法で接合。110も109と同様に無文軒平瓦だが内区幅が1.5cmとやや広い。上縁は2.5cm、下縁は1.0cm。瓦当右半部を欠損しているが、幅は復元で24.0cmほどか。平瓦にはA技法で接合。111は無文袖瓦b類。完形で幅17.0cm、高さは左8.2cm、右6.0cm。A技法によって接合。



第16図 下ノ城採集瓦測図2 (1/3)

IV. おわりに

高祖山における自然遊歩道改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果、高祖城（上ノ城）に関する情報が得られた。遺構としては虎口（城門）、石塁、礎石群等を検出している。遺物としては十師皿、水甕、土鍋、火鉢等の日常雑器の他に、貿易陶磁器、花瓶等の威信財も出土している。なかでも、瓦はほぼ一式出土しており、また出土量も多く、当時としては珍しい総瓦葺の建物が高祖城（上ノ城）に構築されていたことが想定できる。以下、各項目についてまとめてみたい。

1. 遺構について

高祖城（上ノ城）調査の結果、石塁、虎口（城門）、礎石群等を検出した。

石塁は各郭の北側端部と東西両谷部で確認できた。現存高は約1.5mを測り、復元高は約2mと推定される。石塁の石材は拳大のものから大人が一抱えできる程度のものである。築造方法としては①地山整形→②約2m程石材をほぼ垂直に積み上げる→③テラスをもうけて再び約2m程石材をほぼ垂直に積み上げるという工法であり、石塁は階段状に組まれている。その石塁崩壊防止のため、石塁基礎部前面の一部には方形の石材が地山に打ち込むように設置されている。また、約1m (3.5尺) ごとに基準点と想定される石材を設置している箇所も確認できる。なお、石塁と礎石群との関係であるが、石塁から約3～4m離れた郭内部に礎石群は設置されている。このことは石塁直上に何等の建築物の構築が不可能であったことを意味し、石塁はテラス部の面積を拡張するための上止めとして設置されたと考えられる。典型的な織豊期（天正10～天正15年）以前にみられる在地の石塁である。

虎口（城門）は2ヶ所で検出した。築造方法としては①地山を階段状に整形する→②踏石を敷けるという工法である。その踏石は上面を水平に整えられた石材が用いられており、崩落を防ぐため基礎部は小石で補強されている。虎口幅は2.1m (7尺) を測る。

礎石群は最上郭において確認している。礎石間の距離は約1m (3.5尺) と2.1m (7尺) を測る。礎石の裏込に拳大の石材と瓦の破片を利用している。

以上からわかるように、これらの遺構はすべて2.1m (7尺) を基準として構築されていた。

同時期の遺跡に波多江遺跡¹¹⁾がある。この遺跡は今宮ハイパス関係の発掘調査の際、確認されたものであるが、方形に区画された溝の内側には孤立柱建物、井戸等の遺構が検出されている。その孤立柱建物の柱間寸法の基準尺の一つに7尺がふくまれているのも注目する。また、ほぼ同時期に浴城した勝尾城（佐賀県鳥栖市・筑紫氏の居城）に関連する遺跡も7尺が基準尺の一つであったことが想定され、同時にその建築部材が北部九州において流通していた可能性が高いことを意味する。

2. 高祖城の破却について

調査の結果、高祖城（上ノ城）の石塁は根こそぎ石材を抜き取られた部分と別の石材で全体を覆

い隠された部分に分類できる。

根石から根こそぎ石材を抜き取られた部分は道などの重要箇所直結する限られた部分の石畳であったと想定され、落城の際、徹底的に破却されたと考える。

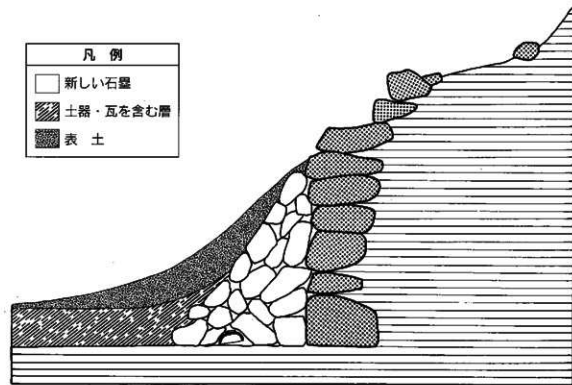
その一方において、別の石材で全体を覆いかくされた石畳は大半を占めた。大半の調査区で、表土を除去するとスロープ状に積まれた石積みを検出した。調査当初、その石積みはただ単なる石畳の崩壊部分と考えていたが、調査が進行していくにつれその石積みの下から元の石畳が姿を現し始めたのである。元の石畳の前面にスロープ状に石材が積み重ねてあり、石畳を覆いかくしていたのであった。

また、多量の陶磁器・土師皿・瓦等の遺物が石畳の周辺から出土しているが、不思議なことに一部を除いてスロープ状に積まれた石積みの下からは出土していない。このことから、石畳の前面にスロープ状に石材を積み重ね、石畳を覆いかくした後に上部の建築物等と石畳上部をも破壊したのであろう。そのためにスロープ状に積まれた石積みの上から大半の陶磁器・土師皿・瓦等の遺物が出土したと考える。

ただし、例外として5調査区から出土した青磁碗(No.23)1点のみがスロープ状に積まれた石積みの下から出土している。この青磁碗は伏せた状態で出土しており、その周辺部には焼土及び炭化物も検出している。破却に伴う祭壇に使用された青磁碗であったと考えられる。

以上から、高祖城(上ノ城)の石畳部の破却は徹底的に破壊する部分と石畳を他の石材等で覆いかくすことにより石畳を「石畳」として使用できないようにする部分に分けて実施されていたことがわかる。

なお、虎口においても「虎口」として使用できないように階段の踏石は抜き取られ、その虎口空間は人頭大の石材などでびっしりと埋め込まれていた。これも破却の一部と考えられる。



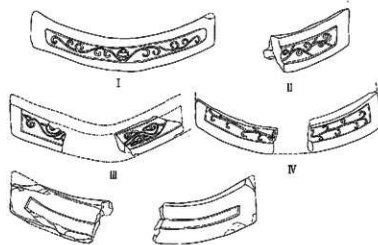
第17図 上ノ城5調査区破却状況断面図(1/20)

3. 出土遺物について

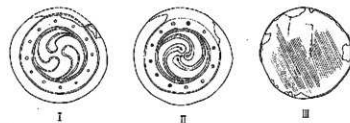
ここではまず軒平瓦・軒丸瓦・袖瓦の文様から型式分類を試みる。

軒平瓦は5類に分けられる。軒平瓦Ⅰ類は74(角瓦)を指標とする。瓦当文様は均整唐草文で中心飾の宝珠から派生する1本の蔓より下・下・上・上・下に唐草が5幅展開する。瓦当幅24.3cm、厚さ4.3cm。44~46が同型式。軒平瓦Ⅱ類は後述の114を指標とする。瓦当文様は唐草文で内区中央を蛇行する蔓から唐草と新たな蔓が上下に展開する。中心飾は不明である。108が同型式。軒平瓦Ⅲ類は51(左半部)・52(右半部)を指標とする。瓦当文様は均整唐草文と思われ、内区中央を2本の蔓が蛇行しており、上の蔓からは上に、下の蔓からは下にそれぞれ唐草が派生する。破片のため文様の全容は明らかにできない。軒平瓦Ⅳ類は48(左半部)・50(右半部)を指標とする。瓦当文様は唐草文で瓦当左半部は中心飾より蔓が派生し下・上・下・上・下・上の上の順に唐草文が8幅展開するが、右半部は展開の仕方が上下逆になる。中心飾は48より宝珠文か。47・49が同型式。軒平瓦Ⅴ類は110を指標とする。瓦当文様は無文で文様区幅が1.5cm。54・102が同型式。

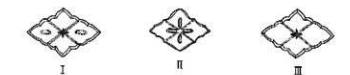
軒平瓦



軒丸瓦



袖瓦



軒丸瓦は3類に分けられる。軒丸瓦Ⅰ類は105を指標とする。瓦当文様は三巴文。内区の内区は肉厚で背に稜をもたない。右巻きで巴の尾が互いに接し曲線をなし内区と外区を面す。外区には径約4mmの珠文が等間隔に12個めぐり。周縁は平縁。つくりがやや粗い。径13.0cm。軒丸瓦Ⅱ類は61を指標とする。瓦当文様は三巴文。内区の内区はⅠ類に比べ肉厚で、背に稜をもたぬ断面が三角形となる。内区中心の珠文を中心に左巻き。巴の尾が長く互いに接し曲線となる。外区には径約4mmの珠文がほぼ等間隔に12個めぐり。つくりはⅠ類に比べて丁寧。周縁は平縁。径13.0cm。62・106・

第18図 高祖城出土瓦分類図(1/5)

115が同型式。軒丸瓦Ⅲ類は107を指標とする。瓦当文様は無文でハケメを施す。径12.0cm。

袖瓦は3類に分けられる。袖瓦Ⅰ類は63を指標とする。文様は唐花菱文で×字の圏線によって4つに区画され四つ割菱文となる。中心には十字の飾があり、その左右の菱文の中央にはあまり明瞭ではないが横枘掛田の文様がみられその縁が突起する。袖瓦Ⅱ類は64から復元を行った。文様は唐花菱文でⅠ類と同様に4つに区画され四つ割菱文となる。中心飾から一文字のスタンプ文が十字に配されようか。袖瓦Ⅲ類は66から復元を行った。文様はⅠ類やⅡ類と同様に四つ割菱文となる。Ⅰ類やⅡ類にみられるような装飾はなく最も簡略化した型式といえる。65・67～70が同型式。

以上、軒平瓦、軒丸瓦、袖瓦について型式分類を試みた。次に問題になるのは軒平瓦と軒丸瓦の組み合わせである。軒平瓦ではⅠ類とⅣ類がそれぞれ総数の24% (4/17) を占めており、軒丸瓦ではⅡ類が47% (4/6) を占める。よって軒平瓦Ⅰ類とⅣ類のいずれかか軒丸瓦Ⅱ類と同時に昏かかれていたと考えることができるが、次項で述べる甲城推定地では軒平瓦Ⅱ類と軒丸瓦Ⅰ類がセットで表採されている。いずれにせよ検討資料が少ないので、今後の資料増加をもって再検討されるべき課題である。

また唐花菱文袖瓦の類型は立花山城(福岡市東区)や古処山城⁴⁴(甘木市)でも表採されている。この2城の袖瓦は高祖城例より文様が細かく写実的であることから高祖城例より古い型式とみられる。なお立花山城では軒平瓦Ⅰ類とⅤ類も表採されている。

最後に土器、陶磁器について⁴⁵だが、24～29・98の白磁、31・32・99の染付は16世紀の所産で廃城時期(1586年)を下るものではないと判断される。また30の鉄絵は14世紀の所産で類品を多くみない。23の青磁碗も選升から15世紀の所産と判断されるが、廃城時期を考慮すると威信財として伝世したものであろうか。出土量が最も多い土師皿は体部が内傾気味で底径7.0cm前後のものが多い。地域は異なるが16世紀半ば～後半に比定される花尾城(北九州市八幡西区)出土の上師皿と器形・法量ともに共通する⁴⁶ことから、高祖城出土の土師皿も同様の時期を示すものと思われる。

4. 唐花菱の家紋瓦について

遺物のなかで最も出土量が多かったのは瓦である。種類も多様でほぼ一式の瓦が出土しているが、なかでも唐花菱の家紋瓦の出土は注目値する。この項においては唐花菱の家紋瓦について考えてみたい。

唐花菱の家紋瓦を使用していたのは守護大名として中国地方に覇をとなえていた大内氏である。大内氏は多々良姓で周防大内村を本貫とし、同国の在庁官人として、国衙機構を通じて在地に勢力を扶植し発展してきた。大内氏が糸島地方に進出した際、大友氏と対抗すべく怡土郡代として周防より烏田氏を派遣し、高祖城を居城とした。

まず、大内氏の家紋の使用許可について考えてみたい。烏田氏は大内氏の直接の被官のため、主人の家紋である唐花菱文の使用を許された可能性は高いと考える。それでは、大内氏の糸島地方への進出の際に同氏の傘下に入った高祖城主原田氏の場合はいかようであったのだろうか。原田氏の事例ではないが、築後の國人領主田尻氏は陣幕の紋について大友家の家紋「杏葉」の使用許可を要請し、大友氏より許可を受けている⁴⁷。地方の國人領主が有力大名に家紋の使用を要請することは政

治的に服従したことを意味し、同時に有力大名は家紋の使用を許可することによって地方の國人領主との政治的結束を固めていった。原田氏が大内氏より唐花菱の家紋の使用を許可されたことを示す史料は現時点において確認していないが、大内氏の傘下に入った際に原田氏は唐花菱の家紋の使用を許可されたと考えられる。

次に高祖城における唐花菱の家紋瓦について考えてみる。その唐花菱の家紋瓦は烏田氏が大内氏より家紋の使用許可を得て作製したものか、もしくは元々高祖城主であった原田氏が大内氏の傘下に入ったために大内氏より家紋の使用許可を得て作製したものか不明である。しかしいずれにしても高祖城は大内氏の糸島地方支配における最重要拠点であり、大内氏の權威を誇示する必要があるのだろう。そのために唐花菱の家紋瓦が作製され、高祖城(土ノ城)の建物の屋根に使用されたと考えられる。城跡ではないが、博多遺跡群からも第29次調査で「四つ割菱」の家紋瓦⁴⁸が、第71次調査では「四つ割菱」文と巴文が組み合わさった軒丸瓦⁴⁹が出土している。16世紀前半まで博多浜が大内氏の支配下にあったことから、博多遺跡群から出土した遺物に関しても大内氏との関連を指摘できる。

その一方において、菱は繁茂しやすく、その菱を形取った唐花菱文は元来縁起が良い文様として考えられており、武家の家紋・武具・土器等に多用されてきた。唐花菱の家紋瓦は高祖城の他に大友氏の筑前支配の拠点の一つであった立花城と秋月氏の本城古処山城でも採集されている。立花城・古処山城の岡城はあまり大内氏の影響を受けていない。そのためここで使用されている唐花菱の家紋瓦と大内氏の家紋との関連は考えられず、唐花菱の文様自体の意味、すなわち縁起の良い文様として使用されたと考える必要がある。

以上から、高祖城は大内氏にとって糸島地方支配のための最重要拠点であり、大内氏の權威を誇示するため唐花菱家紋瓦が作製され、高祖城(土ノ城)の建物の屋根に使用されたと考える。

ただし、その一方で唐花菱の文様が縁起の良い文様であるという理由から使用されたと考えられる事例もあることから、このテーマについては今後新たな資料の蓄積を待って別稿において再考したいと思う。

参考文献

1. 『波多江遺跡』(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集。福岡県教育委員会。1982年)
2. 『勝尾城下町遺跡』(鳥栖市文化財調査報告書第57集。鳥栖市教育委員会。1999年)
3. 山崎龍雄「福岡市周辺山城の表採資料の紹介-1」(『北部九州中近世城郭情報誌』4。2003年)
4. 片山安夫「北部九州中近世～近代城郭瓦拵本集」。2000年
5. 陶磁器全般については大庭康時氏(福岡市教育委員会)よりご教示を賜った。
6. 佐藤浩司「北九州地域の15～16世紀の土師器」(『太宰府市陶磁器研究～森田勉氏追悼論文集-1』。1995年)
7. 大友宗綱(鎖鑑)判物(旧屏家文書)〔佐賀県史料集No.117〕
8. 『博多7』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集。1987年)
9. 『博多7』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集。2000年)

V. 「里城」 想定地表採資料

1. 発見の経緯

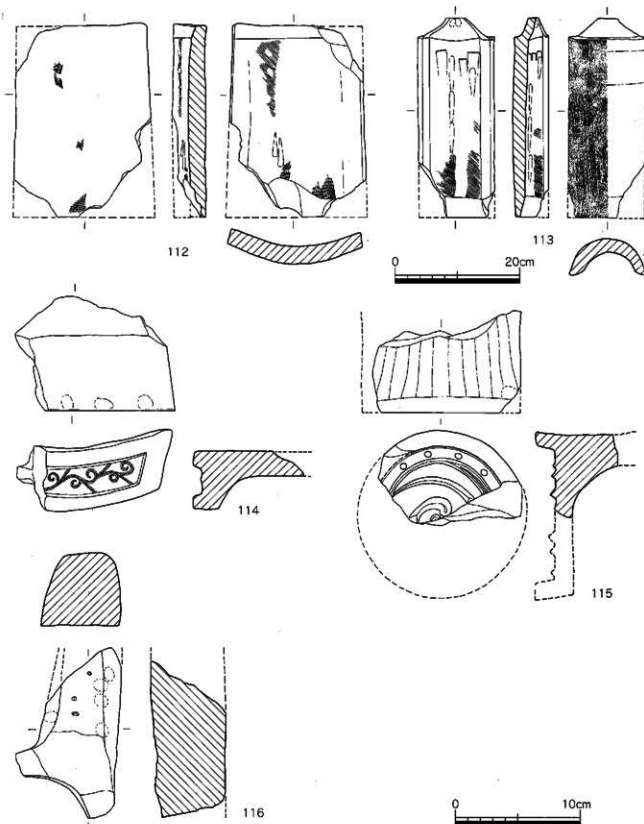
「里城」想定地は高祖宮の北東約170mに位置する。平成10年度の高祖城発掘調査に伴う踏査中に、偶然発見した。想定城は方形を呈し、約120m×約120mを測ると推測される。想定城は数段の郭からなり、想定城の南辺部では石塁の一部を確認している。高祖山頂上部（高祖城）に繋がる登山道はかつての大手道であったと考えられ、想定城の北辺部はその登山道に接している。今回瓦等を表採した箇所は想定城のもっとも高い郭に位置し、切り岸・礎石・基壇状の石塁の一部を確認している。当該地区で表採した瓦は高祖城出土瓦と同じであり、なかでも二次的に火を受けた跡（火災の跡か）のある瓦片を多く表採できた。当該地一帯を「里城」と想定すると、二次的に火を受けた跡のある瓦片はかつて落城したことを示唆する貴重な資料となる。

2. 遺物概説（第20図、表11、図版14-b）

112は平瓦である。上下端部を一部欠損するが長さ30.6cm、幅は復元で上端部20.8cm、下端部22.6cmを測る。凹面・凸面ともにハケ状の痕跡が一部に残るが、全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。また、凹面・凸面の一部に二次的に火を受けた跡が残る。113は丸瓦である。下端部の一部を欠損するが長さ22.0cm、幅12.2cmを測る。凸面は細目叩き後、上端をナデ消す。凹面はコビキAの切り離し痕が残るが、ほぼ全体的にハケ状工具と指先で丁寧にナデ消している。114は軒平瓦である。瓦当文様は唐草文で内区中央を蛇行する蔓から唐草と新たな蔓が上下に展開する。115は軒丸瓦の瓦当部分である。復元瓦当径は約13cmを測る。瓦当内区の文様は二巴文で、巴が左に巻き、尾が互いに接し圓縁をなす。116は鬼瓦の角が牙の一部と考えられる。



第19図 「里城」 想定地位置図 (1/5,000)



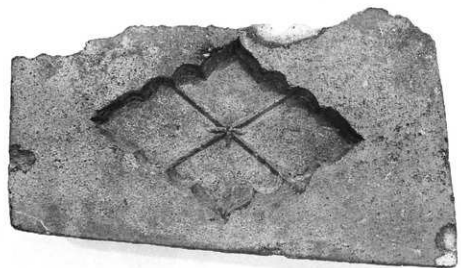
第20図 「里城」 想定地採集遺物実測図 (1/3、1/6)

版 圖



黃山縣地形圖 (小比例尺地圖)

图版2



a. 高相城跡瓦



b. 高相城出土瓦（一式）

图版3



上ノ郷遺跡（北より）

図版4



a. 上ノ城1調査区 (西より)



b. 上ノ城1調査区 (南より)

図版5



a. 上ノ城2調査区 (北より)



b. 上ノ城2調査区 (北西より)



a. 上ノ城3調査区 (北より)



b. 上ノ城4調査区 (北より)



a. 上ノ城5調査区 (北西より)



b. 上ノ城5調査区 (北より)



a. 上ノ城6調査区 (西より)



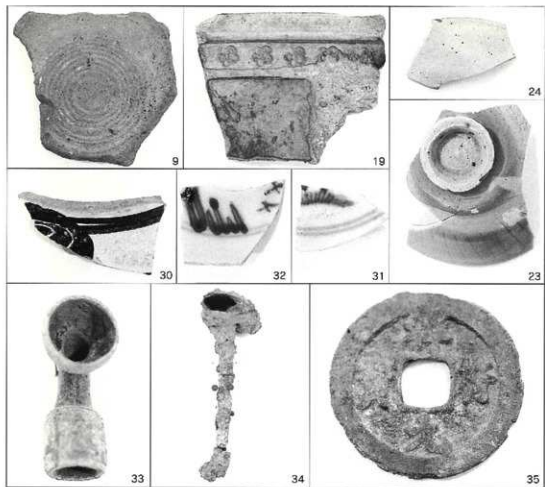
b. 上ノ城7調査区 (北より)



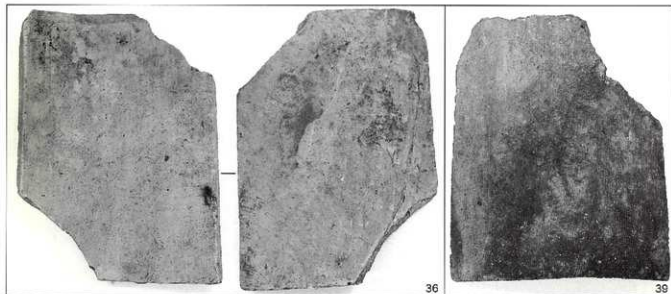
a. 上ノ城東谷舞石壁 (北より)



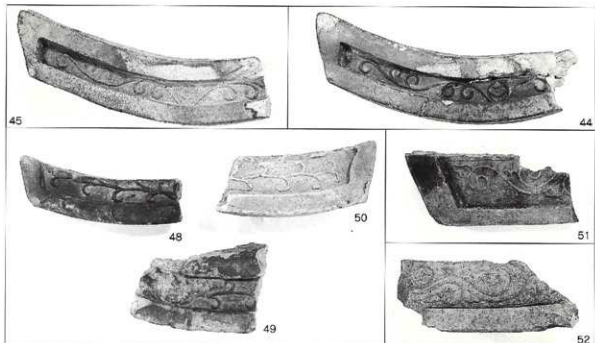
b. 上ノ城5調査区破却状況 (東より)



a. 上ノ城出土土器・金銀器



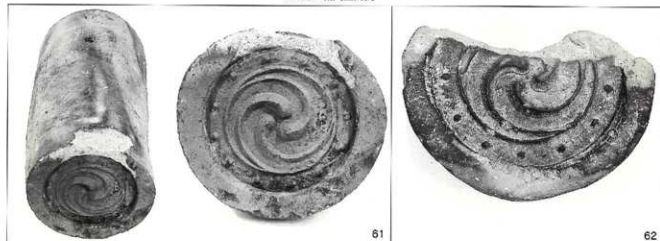
b. 上ノ城出土平瓦



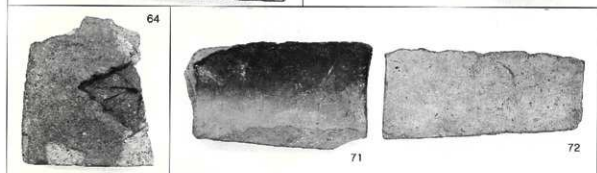
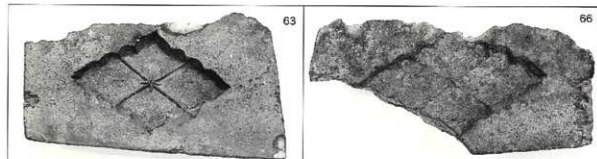
a. 上ノ城出土軒平瓦



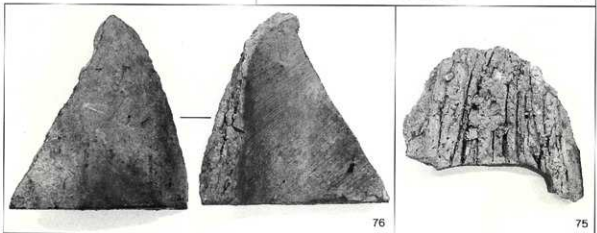
b. 上ノ城出土丸瓦



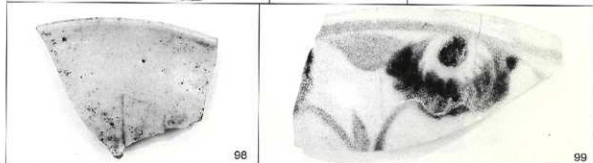
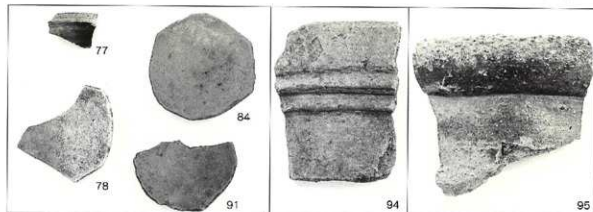
c. 上ノ城出土軒丸瓦



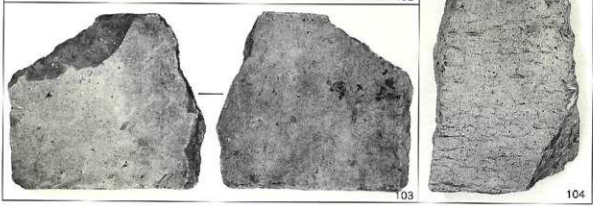
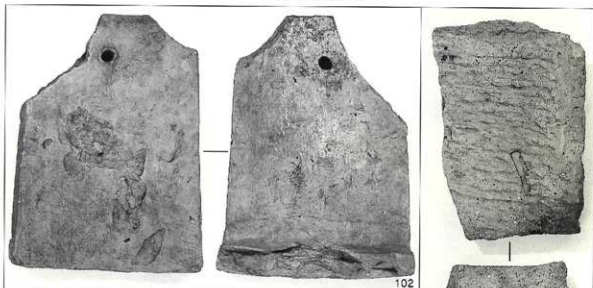
a. 上 / 城出土袖瓦



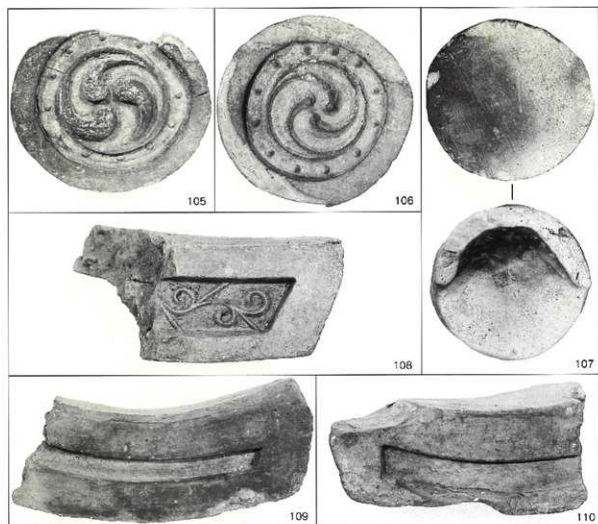
b. 上 / 城出土特殊瓦



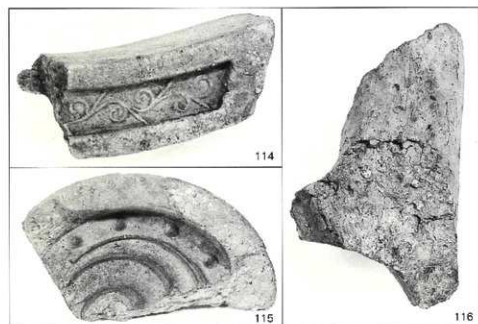
a. 下 / 城探集土器



b. 下 / 城探集瓦 1



a. 下ノ成採集瓦2



b. 「里城」想定地採集遺物

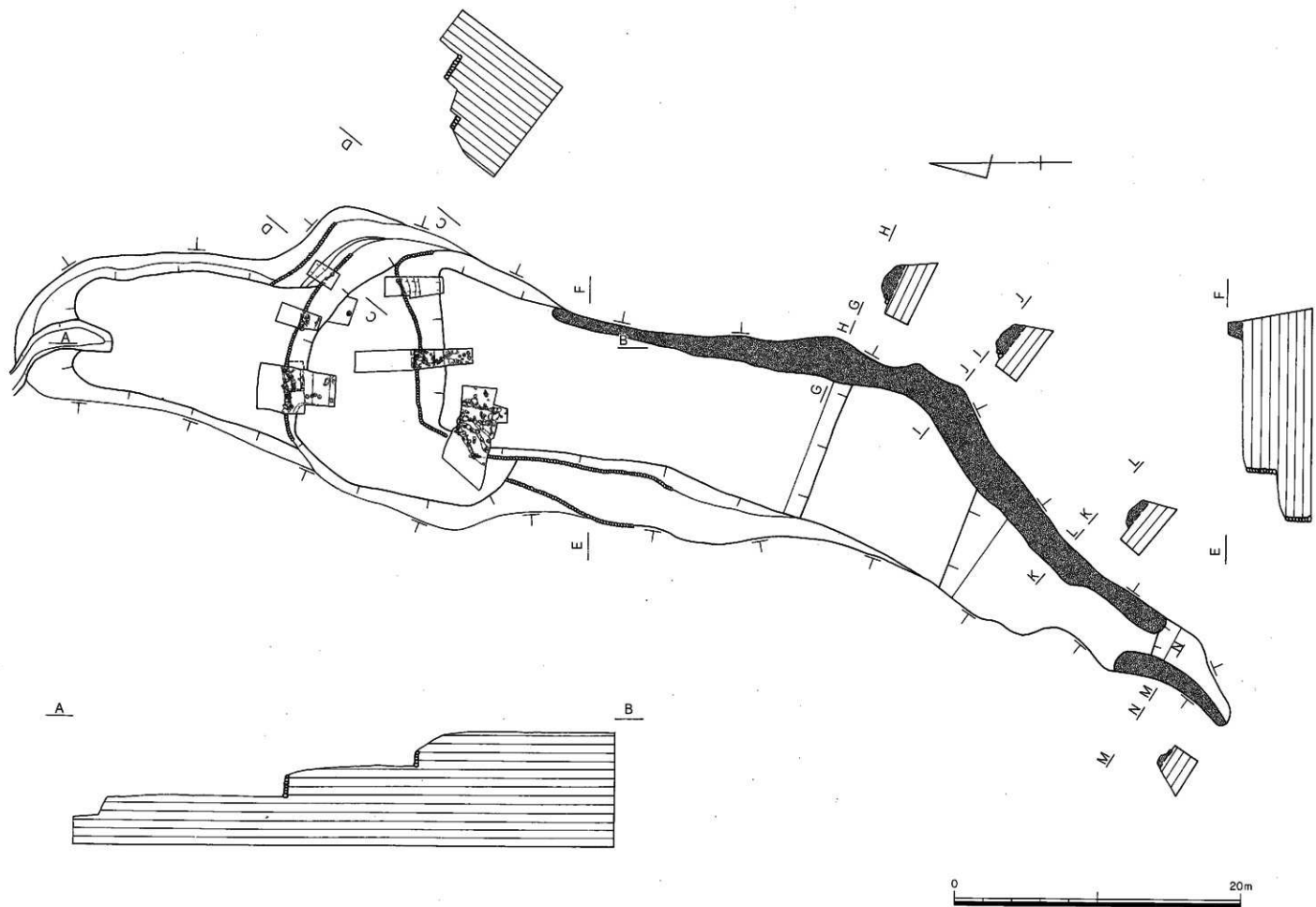
報告書抄録

ふりがな	たかすじょう							
書名	高祖城							
副書名								
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
著者名	瓜生秀文							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査照図
		市町村	遺跡番号					
高祖城	福岡県前原市前原西一丁目1番1号 実学高等学校 1	40222				1988.9.16~ 1999.2.16	約66㎡	公共事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高祖城	城跡断	戦国時代	石垣 泥口(城門)		土俵皿 陶磁器 瓦			

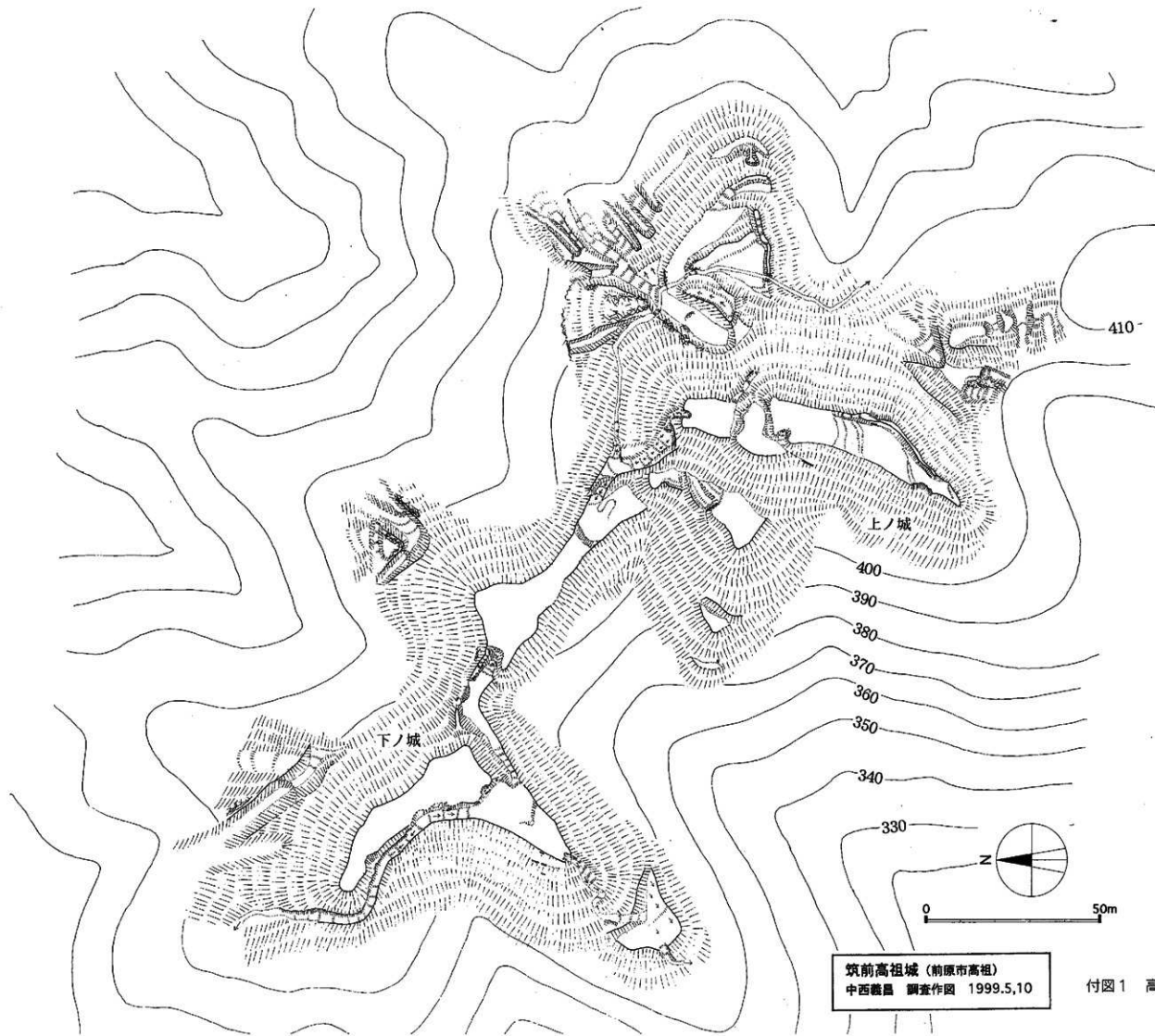
高 祖 城

前原市文化財調査報告書 第85集
2003年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目1番1号
TEL.092-323-1111
印刷 ㈱重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL.092-322-0191 FAX.092-324-2661



付図2 高祖城(上ノ城)遺構図(1/250)



付図1 高祖城縄張り図
(1/1,000)